

細川幽斎の紀行文をめぐって

柳 沢 昌 紀

はじめに

細川幽斎は、戦国期から江戸時代初頭にかけて生きた武将で、歌人・古典学者としても名高い人物である。その実父については諸説あるようだが、母は清原宣賢女の智慶院である。また従来、細川元常の養子となったと言われていたが、近時、山田康弘氏により、足利十二代將軍義晴の内談衆であった細川晴広の養子という新説が出された¹⁾。それ以前は元常の養子であることが定説だったわけだが、現在は晴弘養子説が支持されつつあるようである。

長じては足利十三代將軍義輝、十五代將軍義昭に奉公衆として仕え、その後織田信長麾下の武将となる。丹後の国主となるも、天正十年（一五八二）に本能寺の変が起こると剃髪して幽斎と号し、家督を息子忠興に譲った。その間に三条西実枝から『古今和歌集』に関する秘伝の授受である古今伝受を受け、実枝が没すると、実枝の子公国に返し伝受を行うものの、公国が天正十五年に亡くなると唯一の古今伝受継承者となる。その一方で豊臣秀吉に御伽衆として仕え、九州遠征、

関東遠征に同道した。

さて、幽斎は、その九州遠征の際に『九州道の記』、関東遠征の際に『東国陣道記』と、それぞれ紀行文をものした。本稿ではまず、『九州道の記』の草稿本を紹介する。それが、いかなる形で清書本に整えられたのか、考察してみたい。また『東国陣道記』についても一伝本の紹介をし、その性格について若干の検討を行うことにする。

一 『九州道の記』の諸本

『九州道の記』は、秀吉が天正十五年に島津・大友両氏の抗争を平定するため出陣した折、幽斎が一月余り遅れて丹後の田辺城から九州を訪ねた際の紀行文である。

幽斎は、秀吉が隈本（熊本）に着陣した後の四月二十一日に、自らの隠居城である丹後の田辺城を出発。同国湊を出港して日本海側を進み、途中杵築の社、現在の出雲大社に参詣するなどした後、五月十日に長門国瀬戸崎に到達。翌日陸路、関の渡、現在の下関に向かう。二

十三日に小倉、二十五日には秀吉本陣となる箱崎宮に至り、太宰府、姪浜などに遊ぶ。六月八日には千利休のところで、島津義久を降伏させた秀吉に会って連歌一折を巻き、二十七日には多くの花瓶を並べた花寄せの会があり、幽斎の発句、秀吉の脇、大村由己の第三の一折の連歌を興行する。

その後、七月四日に秀吉は関の渡より上洛の途につき、幽斎も瀬戸内海を大坂に向かう。七日に周防の山口に立ち寄り、厳島で連歌などに出座した後、十七日に備後津郷、現在の福山で足利義昭と面談する。⁽²⁾姫路、明石などを経て、七月二十三日に難波に帰着する。『九州道の記』の紀行は、その間の約三ヶ月に及ぶ旅であった。

本書の善本と言えば、永青文庫蔵幽斎自筆卷子本一軸が熊本大学附属図書館に寄託されている。⁽³⁾現物は残念ながら未見だが、今回は国文学研究資料館が所蔵するマイクロフィルム⁽⁴⁾によって、字体や本文を確認した。また、『新編日本古典文学全集・中世日記紀行集』に、伊藤敬氏の校注・訳を付して翻刻されたものがある。⁽⁵⁾『九州道の記』の写本はかなり多く、よく読まれたことがわかる。伊藤氏によれば、「諸本間に大異はなく、流布過程で生じたとみられる少異は多いが、系統を分つたものではない」⁽⁶⁾とのことである。

『九州道の記』が最初に出版されたのは、小瀬甫庵の『太閤記』巻十の一部としてであった。『太閤記』の初版には刊記がないが、長谷川泰志氏により寛永十一年（一六三四）以降、同十四年以前に出版されたと推定されている。⁽⁷⁾『太閤記』は言うまでもなく、豊臣秀吉の一代記だが、その巻十は秀吉の九州遠征の記事を載せる。その後半部に「幽斎道之記」として、本書の全文が引かれている。末尾には「此寛

之記。いふかしき所もあんめれと、類本なければ。跡も正さすかく記し付畢」と記されている。⁽⁸⁾ちなみに幽斎は、慶長十五年（一六一）に七十七歳で没している。『太閤記』の刊行は、そのおよそ二十五年後のことであった。

その後、『九州道の記』は、寛文九年（一六六九）に京の吉田四郎右衛門から『幽斎道之記』の題簽題を付され、一冊本として出版される。⁽⁹⁾また『九州道の記』は、『東国陣道記』とともに、幽斎の家集である『衆妙集』にも収められる。『衆妙集』には飛鳥井雅章による寛文十一年の跋文が付されていて、幽斎の曾孫にあたる行孝が烏丸資慶に編纂を依頼したが果たせず、資慶没後に飛鳥井雅章によって編まれたことがわかる。雅章筆本の翻刻は、古典文庫に収められている。⁽¹⁰⁾そして元禄四年（一六九一）には、江戸の伊勢屋清兵衛から二冊本として刊行されている。⁽¹¹⁾そのほか『九州道の記』は、肥後熊本藩細川氏の家史である『綿考輯録』、さらに塙保己一の群書類従・紀行部等にも収録され、広く読まれてきた。

以上の諸本を比べてみるに、伊藤氏が言うごとく、さほど大きな異同は認められないようである。

一一 柳沢蔵『玄々紀行』の概要

ところが家蔵の一本は、書写年代がかなり古そうで、本文の一部に取り消し線が引かれたり、行間・欄上等に追加・修正本文が書き込まれたりしている。『九州道の記』の草稿本ではないかと思われるものなのである。まずは略解題を記し、箱書と表紙を掲出する。

箱書



表紙



柳沢蔵

大和綴一冊。「天正年間」写。

表紙 後補丁子色疋繫ぎ地に金糸で動物（犬か）を織り出した裂表紙。

二六・九×二・五糎

題簽 左肩後補金砂子散らし題簽「玄々紀行」。

料紙 斐紙、全丁裏打あり。

前付 墨付第一丁才に「魏紫姚黄向後天／飛来双蝶更遽然／於按縦為

一生恨／世是花王許近前／（一行空白）／発句写留了」とあり（本文と同筆か）。

内題 なし。

界 なし。

字面高さ 一九・八糎

本文 每半葉九十二行、詞書きは行十五字内外、漢字平仮名交じり、わずかに読仮名あり、歌は二行書き、一部に取り消し線が引かれ、行間・欄上等に追加・修正本文あり。

墨付丁数 二七丁（含前付）。

遊紙 前後一丁ずつあるも、裏打時の後補

印記 なし。

備考 木箱入り、箱書は蓋表中央に「玄々紀行幽斎筆作
題号通躬卿」。前田香雪による大正三年六月の「副簡極」あり。

表紙左肩には、「玄々紀行」と記された題簽がある。本は木箱に収められているが、その蓋にも「玄々紀行」と記されている。

箱書は、「玄々紀行」の下に「幽斎筆作／題号道躬卿」とある。こ

れを信ずるに、「玄々紀行」という題号は、江戸中期の公家で歌人の中院通躬によつて付されたもののようである。これは前述の『衆妙集』を意識しているのではないかと思われる。『衆妙集』の飛鳥井雅章跋は、次のごとくである。¹²⁾

此集者法印玄旨之詠哥也。(中略)偶以清書之本備 法皇之御覽、辱賜其名号衆妙集。是玄旨之集而玄之又玄之意歟。又被染 御筆被下外題。法印身後之栄道之冥加何事可過之乎、誰人不仰之哉。件清書之本任其懇望贈行孝之間、以事之始終記紙尾者也。

寛文第十一曆季冬

雅章

『衆妙集』の名が「法皇」、すなわち後水尾院より与えられたことを記し、「是玄旨之集而玄之又玄之意歟」と解釈する。「玄旨」は言うまでもなく幽斎の別号であるが、「玄之又玄」は、『老子』第一章の「玄之又玄衆妙之門」が出典である。¹³⁾ よつて「玄々紀行」の書名は、『衆妙集』と同様に、幽斎自身によるものではないと考えて宜しいかと思う。恐らく現在の装訂に仕立てられた時に、通躬によつて命名されたのではないだろうか。

中院通躬は寛文八年(一六六八)に生まれて、元文四年(一七三九)に没している。霊元院歌壇で活躍し、正徳年間には種々の地方名所詠に積極的に関与したとのこと。¹⁴⁾ 通躬がどのような経緯でこの本に題号を付すことになったのかは不明だが、通躬の四代前の中院通勝は、細川幽斎に和歌と古典を学び、古今伝受を受けている。そんな経緯もあつて、当時の所蔵者が通躬に題号を依頼したものかもしれない。

柳沢蔵本の筆跡と永青文庫蔵幽斎自筆卷子本の筆跡を比べてみると、柳沢蔵本は草稿本、永青文庫蔵本は清書本と思われ、運筆の丁寧さに

差異が認められるのだが、それでも仮名の「あ」「の」「ひ」、漢字の「思」などは形が似ているように思われる。また文章部分と歌の高さが、柳沢蔵本は歌の方が高く、永青文庫蔵本は文章の方が高い。このことの意味については後で考えようと思う。永青文庫蔵本が幽斎自筆で間違いないのならば、とりあえず柳沢蔵本の筆跡も幽斎のそれと考えて、特に問題はないように感じられる。本来ならば両方の図版を並べて掲出し、検討すべきだが、いずれ別稿を用意することにした。

三 丹後の国からの出立

以下、柳沢蔵本の本文の一端を見てゆこうと思う。柳沢蔵本の該当箇所と翻字、その後に永青文庫蔵本の翻字を示す。柳沢蔵本は取り消し線や加筆・修正本文を正確に記すために改行もそのままに翻字し、永青文庫蔵本は追い込みで翻字する。いずれも私に句読点を補うことにする。

まずは巻頭である。

(柳)

ことし天正十五閏白殿下至九州御進発の事あり。

九州為参陣。○廿一日、田辺をいて、

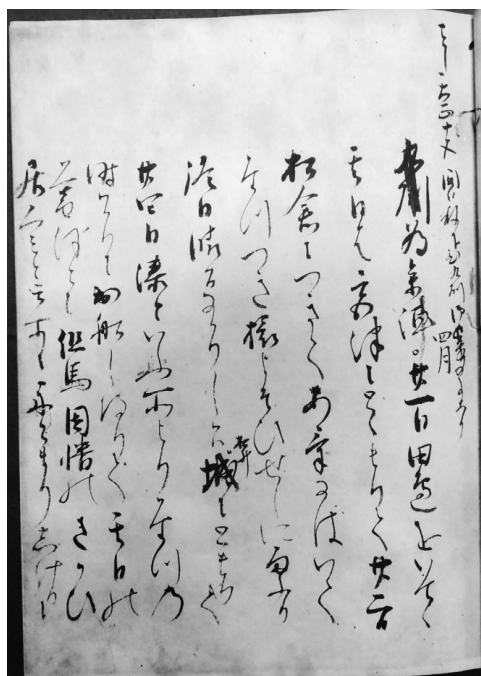
其日は宮津にとまりて、廿二日、

松倉につきて、あけなはいて

たつへき旅よそひせしに、雨ふり、

終日晴間なかりしかは。○城にとまりて、

廿四日、湊といふ所よりたつの



時はかりに出船し侍りて、其日の

暮ほとに但馬因幡のさかひ、

居くみと云所に舟とまりしけるに、

(永)

ことし天正十五三月のはしめ、博陸殿下、九州大友、嶋津わたくしの鉾楯をとめらるへきために御進発の事あり。息与一郎、同玄番参陣のうへ、家をのかれ入道せし身なれば、供奉の事にてもなかりしを、はるかなる御陣のほとをいたつらに在国も空おそろしき心ちして、四月十九日に舟をは熊野郡までまはして、廿一日田辺をいて、其日は宮津にとまり、廿二日松井城松倉につき、あけなはいてたつへき旅よそひせしに、雨ふりいて、終日晴まなかりしかは、松井子禅門といふいてよくりつ、さかつき

たひくいたして、なくさみくらし、其夜はとまりて、廿四日いとよくはれて、風も追手なりといへは、出たつて、足占山ちかけは、

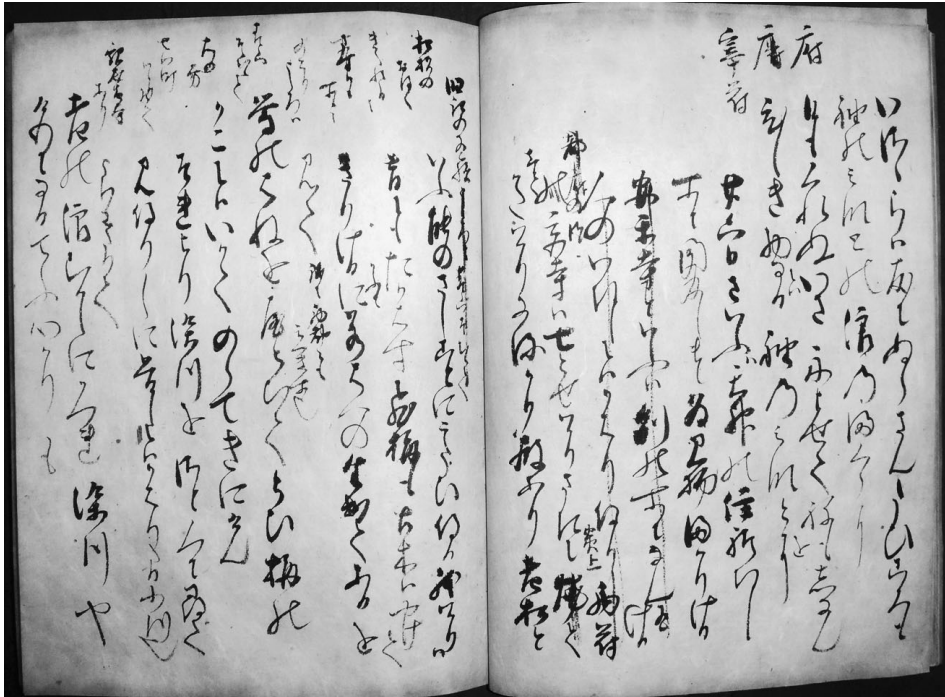
かならずのたひのゆくゑはよしあしもとはてふみみるあしう

らの山

軍書に、欲心則莫令ト問軍吉凶とあれば、思ひよれり。かやうにして湊といふ所より辰時はかりに出舟して、其日の暮程に但馬、因幡のさかひ、居くみと云所に舟とまりしけり。

この箇所は丹後国からの出立を記す。柳沢蔵本の本文は、かなり簡略であることがわかる。その最初のところに、後から「ことし天正十五閏白殿下至九州御進発の事あり」という一文を加えているようである。そして「廿一日」の前に「四月」を補い、当初の本文の五行目の「城」の前に、当時の城主「松井」の名を冠している。

永青文庫蔵本は、その延長線上に、「大友、嶋津わたくしの鉾楯をとめらるへきため」という、秀吉の九州進発目的、そして「息与一郎、同玄番参陣のうへ、家をのかれ入道せし身なれば、供奉の事にてもなかりしを、はるかなる御陣のほとをいたつらに在国も空おそろしき心ちして」という、幽斎自身の旅立ちの理由などを書き加えている。さらに「廿二日」に着いた松井の城松倉での翌日の杯事、「廿四日」の箇所の足占山の歌、そして軍書の一節なども加えて、発端をわかりやすく整えているように思う。秀吉の九州進発目的、幽斎の旅立ちの理由、そして出舟に至るまでの経緯を追加したのは、『九州道の記』が単なる旅の心覚え、あるいは旅日記ではないからであろう。紀行文としての体裁を整える意識に基づくものと解せるように思う。



四 太宰府

次にとりあげたいのは、五月二十六日に太宰府を訪れた場面である。

(柳)

いさゝらは友にぬらさんたひころも

袖のみなとの浪のまくらに

府 日もくれぬいさ舟よせてねもしなん

府 ひしき物なる袖のみなとに

宰府 廿六日さいふ天神の住給ひし

所と聞及しまゝ、為見物まかりける。

安楽寺といふは別の所になん有ける。

人のいひしにはかはり侍りし。西荷

の宮寺八七とせはかりさきに焼て、

かたはかりなるかり殿あり。老松と

旧記の有様予しるに青山そひえて

いふ能のさしことにつたひ侍る躰はかりは、

昔ともたかはす。飛梅も古木はやけて

きりけるに、若はへの生出てあるを

見て、

鶯のはねをやとひてとひ梅の

かこにはいかてのらてきにけん

それより染川をさと人に尋て

見侍りしに、思ひしにはかはりたる小川也。

うちわたりて、

老の浪むかしにかへれ染川や

色になるてふ心かりも

(永)

いさゝらはともにぬらさむ旅ころも袖のみなどの浪のまくらに

日もくれぬいさ舟よせてねもしなんひしき物には袖のみなどを

廿二日宰府は天神の住給ひし所に聞及しまゝ、為見物まかりける。

彼宮寺は七とせばかりさきに炎上して、かたはかりなるかり殿あり。旧跡の有様、松杉のおほくきられたるに、さすがに所々に残り、うしろは青山そひえて、右の方七八町はかりもあるらんとみえて、観世音寺あり。まことに西都ともいふへき所なり。飛梅も古木はやけてきりけるに、若はえの生出てあるをみて、

鶯のはねをやとひて飛梅のかこにはいかてのらてきにけん
それより染川をさと人にたつねて見に行侍るに、思ひしにはかりたる小川のおさきなかななり。うちわたりて、

老の浪むかしにかへれ染川や色になるてふころはかりも

袖の湊の歌一首に続けて、柳沢蔵本では「廿六日さいふ、ここに「は」を補い、「天神の住給ひし所と聞及しまゝ、為見物まかりける」の後、当初は「安楽寺といふは別の所になん有ける。人のいひしにはかり侍りし」と記している。ところがこの記述は取り消され、「西苅の宮寺」、これも「都府の宮寺」に替えてから、それも取り消して「彼宮寺」とし、「彼宮寺は七とせばかりさきに焼て」、これも「炎上して」と修正し、「かたばかりなるかり殿あり」とする。欄上に「府

という字を何度か書いてみたり、「宰苅」と漢字で書いたりしているのは、字の確認をしたのであろう。

本文に戻って、「老松といふ能のさしことにうたひ侍る躰はかりは、昔ともたかはす」とするが、永青文庫蔵本にこの一文は採られていない。そして欄上に書かれた「旧記の有様」を「旧跡の有様」とする。

「うしろに青山そひえて」と続けていたのを削って、「松杉のおほくきられたるに、さすがに所々にのこり、うしろは青山そひえて、右の方七八町はかりにて観世音寺あり」と、行間に書かれた「誠に西都とも云べき所也」を採用し、若干手直しすると、永青文庫蔵本の本文になるのである。そして「飛梅も古木はやけてきりけるに」につなげている。

謡曲の「老松」は世阿弥の作で、梅津の何某が霊夢を見て筑紫の安楽寺に参詣すると、老翁が男を伴つて現れ出て、神木である紅梅殿と老松の謂れを語り、自分はその老松の霊であるといつて消え失せる。その後老松の神霊が現れて舞楽を奏し、御代を寿ぐという内容の複式夢幻能である。謡曲「老松」の中程を引いておこう。¹⁵⁾

謡イセリフ ワキ

「猶々当社の謂委く御物語候へ。」

サシ シテ へ先社壇の体を拝み奉れば、北に峨々たる青山あり、^同へ
臘月松栢の中に映じ、南に寂々たる瓊門あり、斜日竹竿のもとに
透けり シテ へ左に火焰の輪塔あり ^同へ翠帳紅閨の粧昔を忘れず、
右に古寺の旧跡あり、晨鐘夕梵の響き絶ふることなし。

シテは老松の神霊である老翁だが、「サシ シテ」として「先社壇の体を拝み奉れば、北に峨々たる青山あり」とある。また引用部後半には「右に古寺の旧跡あり」ともある。

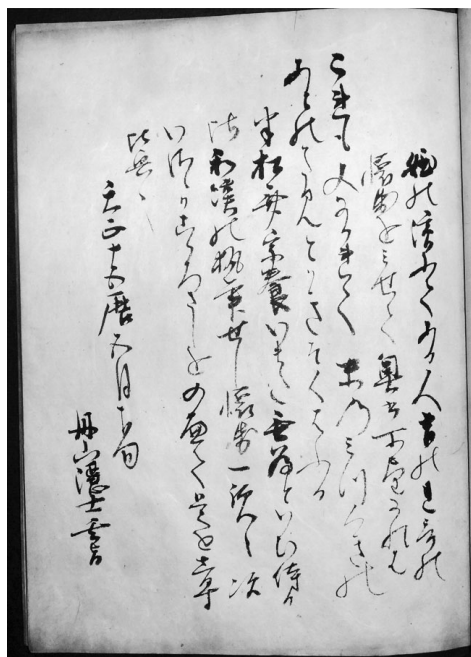
すなわち『九州道の記』の太宰府の記事は、謡曲「老松」を意識し

つつ推敲、添削を重ねたことがわかる。もつともこのあたりの文章が謡曲「老松」を踏まえていることは、『新編日本古典文学全集・中世日記紀行集』の伊藤敬氏の注に指摘がある。¹⁶「老松といふ能のさしこ」とに基づくことは、わざわざ断らなくても読めばわかることであり、そのため曲名「老松」はカットされたものと考えられる。

五 姪の浜

次に、五月二十八日に姪の浜で、ある人から宗養執筆の連歌懷紙に奥書を所望される場面を見てみよう。宗養は幽斎より八歳年上の将来を嘱望された連歌師であつたが、天正十五年を遡ること二十四年前の

姪の浜



永禄六年に三十八歳の若さで没している。

(柳)

姪の浜にて、ある人昔の連哥の懷帛をみせて、奥書所望なれば、

これも又なかれて末のみつくきの

あのかたみとかきそくはふる

半松斎宗養いまた無為といひ侍る

比、和漢の執筆せし懷帛一覽之次、

いさゝかこころさしをのへて是をしるす。

比興く。

天正十五曆五月下旬

丹山隱士玄旨

(永)

姪浜にてある人、宗養執筆せし連哥の懷帛を見せて、奥書所望せしに、

これも又なかれて末のみつくきのあのかたみとかきそくは

ふる

まず柳沢蔵本は、「姪の浜にて、ある人昔の連哥の懷帛をみせて、奥書所望なれば」として、「これも又」の歌を記した後に、「半松斎宗養いまた無為といひ侍る比、……天正十五曆五月下旬／丹山隱士玄旨」という奥書を書いている。しかし、この奥書は不要と判断したのであるうか。永青文庫蔵本では、「姪浜にてある人、宗養執筆せし連哥の懷帛を見せて、奥書所望せしに」という形で済ませている。

奥書の実物と思われるものを削ったのは、これも『九州道の記』が

単なる旅の心覚え、あるいは旅日記ではないからである。巻頭部分に出発の理由や経緯を補って紀行文としての形を整えたのと同じような意識が、この奥書の削除にも介在したのではなかったかと思われる。

六 宇島門、虫明の瀬戸、たての浦

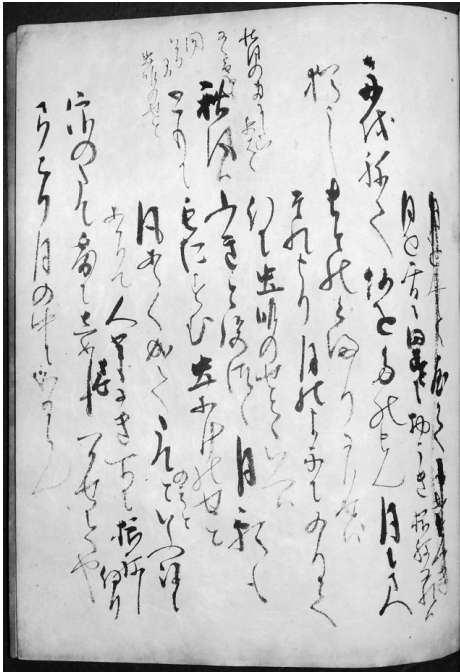
最後に検討するのは、七月十九日の暮れ方以降に、宇島門、虫明の瀬戸、たての浦を訪ねた場面である。

(柳)

用をみてやかて舟出すへき

月をみるに、まことに物つき旅ねなれば、

宇島門、虫明の瀬戸、たての浦



舟をねて何をたのまん月にさへ
猶うしまとのとまりなりせば

それより月のよ、舟にのりて

行に、虫明のせとゝいへは、

秋風の身にしむ
夜は

秋風はふぎと絶つゝ月影も

聞
なく音をも
はかり
なる

ともにもにすむ虫あけのせと

虫あけのせと

風あらく成て、たてといふ津に

あかりて、人里もなき所に旅ねし侍り。

浪のたて露にしめしてつかせてや

弓はり月の中にいるらん

(永)

：かち枕の月をみるに、物つき旅ねなれば、

舟にねて何をたのまん月にさへ猶うしまとのとまりなりせば
それより月の夜、舟にのりてゆくに、虫明のせとゝいへは、

秋風の身にしむ夜ははなく音をもきくはかりなるむしあけの
せと

風あらく成て、たてのうらといふ所にあかり、人さともなき所に
たひねし侍り、

夕浪のたてのうらより弓はりの月もひかりをはなつとそみる

柳沢蔵本は、掲載した箇所三首の歌が記されている。

最初は宇島門の歌である。この歌は、永青文庫蔵本では初句が「舟
にねて」に直されて、採用されている。

二首目は虫明の瀬戸の歌である。これは欄上に「秋風の身にしむ夜
はなく音をも聞はかりなる虫あけのせと」という歌が書かれていて、

七 詠草から紀行文へ

永青文庫蔵本にはこちらが採られることとなる。柳沢蔵本の本行の歌も永青文庫蔵本の歌も、地名の「虫明」に秋の「虫」を掛ける点は同じだが、柳沢蔵本の「秋風はふきと絶つ」の歌は、「虫明」の「明」の縁で「月影」を出すなど、やや歌の意味がとりづらい気がする。そのため永青文庫蔵本では、明解な「秋風の身にしむ夜は」が採用されたのではないかと想像できる。

続いて現在地未詳のたての浦を訪れる場面だが、柳沢蔵本では「風あらく成て、たてといふ津に」とあって、「たて」の右脇に「のうら」とが補われているので、「たてのうらといふ津にあかりて、人里もなき所に旅ねし侍り」と読める。その後が三首目のたての浦の歌で、「浪のたて露にしめして」、これも「しめさせ」と訂正され、「浪のたて露にしめさせつかせてや弓はり月の中にいるらん」となっている。ところが永青文庫蔵本では、「夕浪のたてのうらより弓はりの月もひかりをはなつとそみる」という形に変更されているのである。この二首も趣向はよく似ている。地名の「たて」に夕浪の「立つ」を掛け、矛と盾の盾の縁で「弓はり（の）月」を出す。しかしこちらも柳沢蔵本の歌は難解で、永青文庫蔵本の歌の方がわかりやすいように思う。殊に後半の帰路にあたる部分には、このように歌を差し替えたり、修正したりする箇所がいくつか認められるようである。今回は紙幅が限られていて、全ての歌や句の変更、改作の意味合いについて考察することはできないのだが、幽斎の作歌態度、文芸意識を考える上で、これらの例は大変興味深い材料たり得るのではないだろうか。

以上、『九州道の記』の柳沢蔵本と永青文庫蔵本の本文を、具体的に比べてみた。草稿本と思われる柳沢蔵本と清書本と思われる永青文庫蔵本の間には異同がかなり認められ、本文も歌も加除訂正、差し替えなどが全編にわたってなされていること、それは紀行文として体裁を整え、完成度を高めることに意を払って行われていることが確認できたかと思う。

ところで先に、柳沢蔵本と永青文庫蔵本とは文章と歌の高さが逆になっていることを述べ、その意味については後で考えようと思うと書いた。これまで見てきたように、柳沢蔵本は、文章より歌の頭が高く記されている。これは歌集の体裁である。それが永青文庫蔵本では、文章の頭が高い書式に変更され、紀行文らしくなっている。平安時代の歌物語である『伊勢物語』や『大和物語』は、歌集における歌の詞書きが発展、増補される形で成立したということがよく言われる。それと類似の関係が、ここに認められるように思う。

ここで思い起こされるのは、幽斎と連歌師の昌叱の筆にかかる「天正廿年（玄旨）詠草」一冊である。これも永青文庫蔵で、熊本大学附属図書館に寄託されている。徳岡涼氏の解説によれば、「天正二年（二五九二）の幽斎の和歌、連歌、あるいは狂歌を日並みに書き留めたもので、元日試筆から、九月二十七日の鹿児島での連歌興行までを記す」とのことである。これは「詠草」で、正に歌の書き留めなわけだが、体裁や内容が『九州道の記』柳沢蔵本とやや類似しているようにも思われる。この「天正廿年（玄旨）詠草」については、鶴崎裕雄氏

が、『衆妙集』等の他の歌集とあわせて「詞書を並べると紀行として読むことができる」と指摘している¹⁸。

柳沢蔵本も、「詠草」のような形で記されたものであったが、それを幽斎は紀行文として形にしようと考えた。そのため行間や欄上に加除訂正及び差し替えの書き込みを行った。それをもとにさらに改訂を行った清書本が永青文庫蔵本で、それは紀行文らしく、文章の頭が高い形で記載されたのではないだろうか。

八 柳沢蔵『東国陣道記』について

さて、本稿は『九州道の記』の草稿本の紹介が主たる目的だが、幽斎のもう一つの紀行文である『東国陣道記』についても、少しだけ私見を述べてみたいと思う。

本書は、秀吉が天正十八年（一五八）に小田原の北条氏を攻めるべく出陣した折、幽斎はそれに先だつて田辺城を出立し、小田原、鎌倉に赴いたが、その際の紀行文である。

幽斎は二月二十九日に尾張の熱田、三月四日に遠江国三方原、六日に小夜の中山を経て、八日に駿府に到着している。この時幽斎は、初めて富士山を見たようである。秀吉も三月十九日に駿府に到着し、伊豆の山中城への攻撃が始まるが、幽斎は五月十一日に大磯、翌十二日にかけて鎌倉を見物する。七月五日に北条氏直は小田原城を出、その後、氏政、氏照らが切腹する。

七月十五日に、幽斎は帰路につく。東山道經由で十六日に甲斐の河口、十七日に甲府、二十二日に諏訪湖を見て木曾福島に着く。その後、

美濃の御山を経て二十九日に京都に至るが、帰洛のことは『東国陣道記』に記されていない。

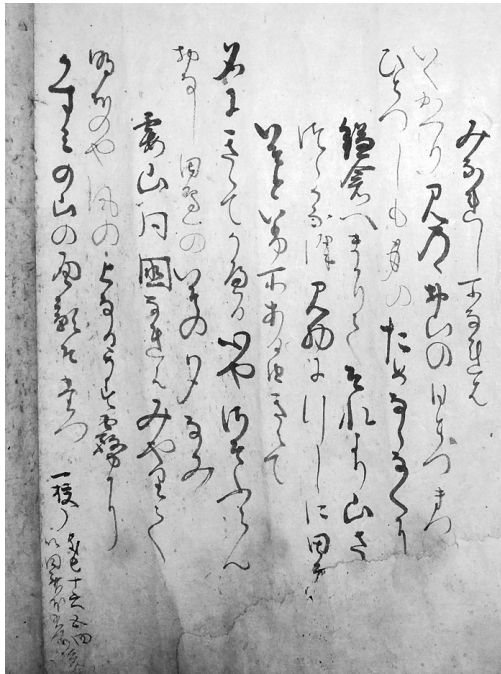
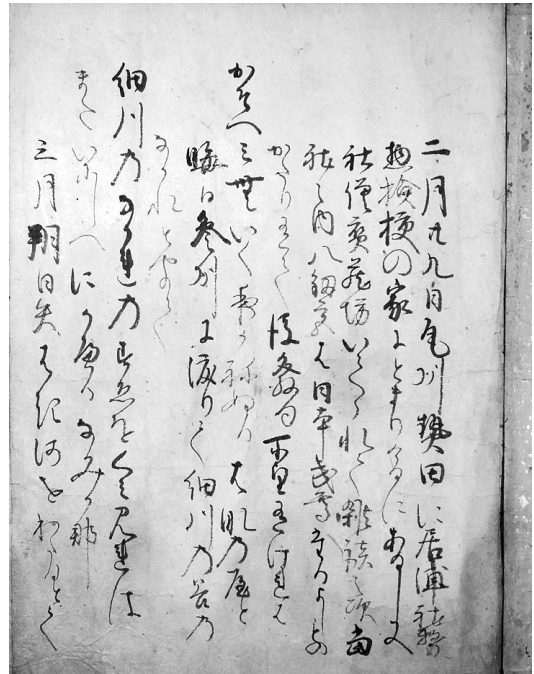
鶴崎裕雄氏は、本書について次のように指摘している¹⁹。

『東国陣道記』は『九州道の記』と較べると、紀行としての完成度が低い。『九州道の記』では冒頭に出発や旅の理由（目的）が述べられ、末尾は大坂に帰着する所で終わるが、『東国陣道記』の書き出しは、旅の途中、尾張の熱田宮から始まり、終わりも何か尻切れのようである。しかも群書類従本の『東国陣道記』の終りの部分と土田氏編 古典文庫²⁷⁰『衆妙集』所収本の終わりの部分を較べると、『衆妙集』所収本には日向国の冬枯れの柿・春秋を競う歌・八条宮の書院開き・松下民部少輔遅参の四首の詞書と歌がある。この日向国の冬枯れの柿の歌などは、天正二十年（文禄元年）の歌である。（中略）幽斎自身『東国陣道記』を紀行として纏め切れていなかったのではなからうか。

古典文庫『衆妙集』に収められた『東国陣道記』の冒頭と末尾を見ると、なるほど冒頭は田辺ではなく「尾州熱田」から始まり、末尾は東国陣とは関係のない歌で結ばれている。鶴崎氏のご指摘の通りかと思う。『東国陣道記』は『九州道の記』の柳沢蔵本のような段階の本文、つまり草稿段階の本文が流布してしまったのではないだろうか。

鶴崎氏は、『東国陣道記』の永青文庫蔵本をご覧になっていないとのこと。「傷みがひどいということと閲覧できなかった」という。『東国陣道記』永青文庫蔵本は国文学研究資料館のマイクロフィルムにもなっていないようで、本文、体裁、筆跡等、筆者も確認していない。

そこで、家蔵の一本を見てみたい。これも略解題を記し、巻頭と巻



末を提示する。

柳沢蔵

巻子本一軸。慶長十六年写か。

表紙 後補裂表紙。二七・四×二三・ 糲。押さえ竹あり。

題簽 なし。

見返 金銀切箔散らし。

料紙 斐紙。

内題 なし。

界 なし。

字面高さ 二一・六糲。

本文 改装前は毎半葉二字か、詞書きは行一六字内外、漢字平仮名

交じり、歌は二行書き、一箇所行間書入あり、朱の校合書入あり。

全長 二四八・七糲（三七糲内外の紙六紙と二七糲強の紙一紙を貼り

継ぐ）。

奥書 「二校了慶長十六五四

以 本書写校合」。

印記 なし。

備考 もと冊子体であったものを改装か。

『東国陣道記』柳沢蔵本は、巻子本一軸だが、「全長」のところに書いたように三七糲内外の紙が貼り継いである。各々の紙のほぼ中央に折り目が確認でき、もと冊子であったものを改装したのではないかと思われる。幽斎自筆ではないが、巻末に慶長十六年（一六一一）の年

次が記されている。幽斎が没したのは、先にも述べたとおり慶長十五年であり、かなり古い写本であることがわかる。

『衆妙集』 所収本の本文と比べると、文章にも歌にも大きな異同は認められないのだが、『衆妙集』 所収本が『衆妙集』の歌番号で七九六番歌まで載せるのに対して、柳沢蔵本の巻末は七八八番歌「明ほのや風の上なるうす霞にかすみの山の面影そたつ」で終わっている。前述のとおり、柳沢蔵本は冊子本を卷子本に改装したもののようだが、この「明ほのや」の歌は最終丁表の最終二行に記されていて、白紙の裏が数センチ分残されている。よって続きが欠落したわけではないようである。

『衆妙集』 所収本の七八九番歌の前には、「公事根元抄、菊亭右府へ尋申事有て、わたり侍ける折ふし雪降けるに、帰宅以後被送待し短冊に」と記されている。⁽²⁰⁾ すなわち、東国陣に供奉した旅中の歌は、七八八番歌が最後なのである。早い段階の『東国陣道記』は、「明ほのや」の歌までで終わっていた可能性があるのではないだろうか。

さて、『東国陣道記』 柳沢蔵本は、これも文章より歌の頭が高く記されている。すなわち歌集の体裁である。これをどのように考えるかと言ふことになるわけだが、本書にも『九州道の記』 柳沢蔵本のような幽斎自筆の草稿があつたのかもしれない。ところがそれはそのままで終わってしまい、その行間や欄上に加除訂正などが行われることはなかったのではないか。

勿論、網羅的な伝本調査をした上でないと、本当のところはわからないわけだが、『東国陣道記』は草稿のままで終わってしまい、紀行文として完成を見ることはなかった。そしてその草稿段階の本文が流

布することとなったという仮説を述べておきたい。

おわりに

本稿では、『九州道の記』の草稿本と思われる柳沢蔵本と清書本と思われる永青文庫蔵本の比較を行った。また『東国陣道記』の慶長十六年の奥書を有する古い写本について検討を行った。細川幽斎の紀行文が紀行文として整えられてゆく手法や方向性が見えてきたように思われる。

『九州道の記』 柳沢蔵本と永青文庫蔵本の全文にわたる比較が、今後の課題となる。和歌のほか、俳諧歌、発句や連句、和漢連句、漢詩も含めて加除訂正、差し替えなどの検討を行うことで、幽斎の文芸意識のさらなる解明が期待できよう。

注

- (1) 「細川幽斎の養父について」(『日本歴史』七三〇、平二・三)。
- (2) 鶴崎裕雄氏「細川幽斎の紀行 もう一つの紀行紹介への布石」(『細川幽斎 戦塵の中の学芸』平三二 笠間書院)。
- (3) 請求番号は一〇八 五 一九。
- (4) マイクロ請求記号は三四 一一 一。
- (5) 平六、小学館。
- (6) 前掲書五四四頁「諸本」の項。
- (7) 「甫庵」太閤記 諸版の成立 正保三年版補入考 「(『国語と国文学』六八 一、平三・一)。
- (8) 慶應義塾図書館蔵本(二二二 一七二)による。私に読点(、)を補った。

- (9) 国立公文書館内閣文庫蔵本の整理書名は『九州みちの記』、請求番号は一七七・一〇七〇。同本は後印本だが、寛文九年の吉田四郎右衛門の刊語と原題簽を有する。
- (10) 土田将雄氏編『衆妙集』(昭四四 古典文庫)。
- (11) 柳沢蔵本は大本二冊。改装本のため原題簽なし。
- (12) 古典文庫本一四二頁。
- (13) 『和刻本諸子大成九』(昭五一 汲古書院) 所収『老子虜齋口義』寛永四年版による。
- (14) 『日本古典文学大事典』(平一〇 明治書院) の「中院通躬」の項(兼築信行氏執筆) 参照。
- (15) 底本に寛永七年黒沢源太郎刊観世黒雪正本を用いた。『新日本古典文学大系・謡曲百番』(平一〇 岩波書店) による。
- (16) 五五七頁注一七。
- (17) 『没後四〇〇年・古今伝授の間修復記念 細川幽齋展』(平二二 熊本県立美術館) 五八頁。
- (18) 「天正二〇年(文禄元年)の細川幽齋 豊臣政権下の文芸の一特徴」(熊本県立大学国文研究) 五六、平二三・六。
- (19) 注(2)に同。
- (20) 古典文庫本一四〇頁。

付記 本稿は、写本・版本ケンブリッジ国際集会(平二五・七、於ケンブリッジ大学エマニエルカレッジ)、中京大学文学会秋季大会(平二六・一一、於中京大学)、中京大学文化科学研究所フォーラム「織豊期の歴史と文学」(平二七・二、於中京大学)の報告に基づく。各席上で貴重な意見を賜った方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。

また本稿は、科学研究費助成事業(基盤研究(B))「中世における合戦の記憶をめぐる総合的研究——長篠の戦いを中心に」(研究代表者・金子拓氏)による成果の一部である。